

## 学習者主体の教育技法の修得に向けた全学的な取り組み

神里みどり、前田和子、赤嶺伊都子、田場由紀、謝花小百合、  
宮里智子、金城忍、上原和代、嘉手苺英子

**【目的】** 本学の看護系の教員を対象に、学習者主体の教育技法の修得に向けた全学的な取り組みを展開し、今後の教育改善につなげることを目的とする。

**【方法】** 大学院担当講師が中心となり、学習者主体の授業案を独自に作成し、本学教員の助教・助手・嘱託助手を対象にした Faculty Development(以下、FD とする) 活動を展開した。FD 活動は、平成 25 年 6 月から 9 月にかけて、第一段階から第三段階と段階別に分けて展開した。第三段階までの評価として、実施状況や各参加者の参加後の感想を無記名による自由記載を整理することで、今後の活動に活かせるようにした。第四段階として、10 月から開始される演習・実習で活用できるように、3 ヶ月、6 ヶ月後にフォローアップ活動を実施計画に取り入れた。

**【結果】** FD 活動の主なる内容は、大学院担当講師 6 名が中心になり、A・B の 2 チームに分かれて、約 5 分間のシナリオを作成し、シミュレーター人形や模擬患者を活用した 60 分からなる学習者主体の授業案を作成した。作成した授業案を各 A・B チームが教師役と学習者役となりプレ FD を展開した(第一段階)。その後、授業内容の修正を加えて、第二段階と第三段階にて助教、助手、嘱託助手を学習者として、A・B チームの講師を中心に模擬授業を展開した。FD 参加者の感想から教師役を努めた講師は、FD の回を重ねるごとに自らの教育力の向上を実感していた。学習者の助教等は新たな教育方略の展開に学びの楽しさや達成感を感じていたが、教育技法を活用するにはかなりの努力が必要だと痛感していた。

**【結論】** 全学挙げての組織的な FD 活動は、これまでの教育法を見直し、学習者主体の教育技法を意識させる上で効果的であったと考える。今回学習した教育技法をどのように具体的に教育活動に取り入れていくのか、今後の課題である。

キーワード：学習者主体、教育技法、全学的取り組み

### はじめに

本大学は、平成 11 年度に開学し、平成 16 年度には大学院(博士前期・後期課程)を同時に開設するなど、約 14 年間の看護教育実績を積んできた県内唯一の看護系単科大学である。教育の質の向上を目指して、大学独自の Faculty Development(以下、FD とする)を随時開催し、教育技法の質の改善に取り組んできている。文部科学省の大学設置基準においても、教員の教育力の質の向上を目指した、組織的な FD 活動の実施を義務付けており、効果的で質の高い FD 活動のあり方が求められている。

これまでの本学の FD 活動は、国内外からの講演者を招聘した単発の講演会を中心としたものが主であり、継続性がないため、実際にどのように教員が教育改善に活用できたのか、明確な評価までは至っ

ていない現状であった。平成 20 年度には大学改革による文部科学省の補助事業を受けて、FD 活動の展開方法にも進展がみられてきた。例えば、学部での臨地実習における教員の実践能力の向上を目指して、実習施設との指導者との協働による実習指導のあり方に関する学習会が継続的に開催されるようになってきた(前田和子、大湾明美他 2011)。これらの FD 活動の効果として、各教員が専門領域の垣根を越えて、臨地実習指導者と実習指導方法の共有を可能にすることで、相互理解と信頼関係を構築し、各自の臨地実習における実践力や教育力の向上に寄与していると考えている。

平成 23 年度には、文部科学省の専門的看護師・薬剤師等医療人材養成の補助事業を受けて、大学院教育での高度実践者育成プログラムの開発(前田和

子、神里みどり他 2012) にあたり、大学院生に対する高度な臨床実践指導力も求められるようになってきた。特に大学院での専門看護師等の実習指導においては、複雑な事例展開や実習のコンピテンシーの到達度達成まで実習を導いていかねばならず、自ずと教員自身の実践指導力も問われてくる。よって、学部・大学院問わず、大学での組織をあげた持続的なFD活動が如何に効果的に展開できるかが、学生の学習能力の向上に影響を与えるのではないかと考える。

今回、FD活動の新たな展開を目指して、「学習者主体の教育技法」をテーマに大学組織を挙げての大規模なFD活動に取り組んだ。このテーマの趣旨は、通常の教員にありがちな古典的で一方的な教授法を打破し、学習者が主体的に学べる環境作りと学習者主体の教育技法の術を身につけて、学部・大学院教育で活用できることである。

本稿では、今回新たに取り組んだ組織的なFD活動を紹介し、今後の教員の教育活動の質改善につなげていきたい。

### 学習者主体の教育技法の操作的定義

学習者主体の教育技法とは、Problem Based Learning(PBL) (Dobald R. Woods /新藤幸恵訳 1994/2003、Mernagh 豊澤英子 2012) や Team Based Learning(TBL) (杉本敬子 2012、Rebecca J. Sisk 2011)の考え方を参考に 教師が学習者に脅威を与えない学習環境を整えて、学習者の主体的な考

えを導き、かつ学習者の知識を結集して、チームで問題解決にあたる教育技法とする。本稿では、学習者主体の教育技法を修得する手段の一つとして、シミュレーション人形や模擬患者を活用した教育手法を取り入れた。

### I. FD活動の方法

FD活動の対象者として、本大学の看護系の大学院担当講師と学部担当教員である助教・助手ならびに嘱託助手の全員とした。実際の学内教員の参加人数を表1に示した。FD活動の展開は第一段階から第四段階とした。FD活動は、平成25年6月から9月に実施した。今回の学習者主体のFD活動の展開にあたり、事前に大学院担当の全教員を対象とした「チームワークトレーニングに焦点をあてたシミュレーション教育技法の実際」に関するFD活動を平成25年3月に実施した(前田和子、神里みどり 2013)。これまでの学習者主体の教育技法に関するFD活動の経過を表2に示した。

第一段階は大学院担当講師6名が中心になり、2つのチーム(各3名、A・Bチーム)を結成して、学習者主体の教育技法を各グループで考案した。その後、チーム内で教師役と学習者役を担当して各チームでのプレFDを実施した。その際に、学習者主体の教育技法を専門とする学外講師を招聘し、全体的なシナリオの構成やデブリーフィングの方法など新たな授業展開方法に対するコメントを参考に、さらなる授業内容の改善に努めた。

表1. FD参加者(学内教員)の概要

実施回	実施日	プロジェクトメンバー*	人数		
			学習者	オブザーバー	合計
第1回目 <sup>1)</sup>	H25/8/13	6	6	9	15
第2回目 <sup>2)</sup>	H25/9/10	6	11	5	22
第3回目 <sup>3)</sup>	H25/9/27	6	8	8	22

\*プロジェクトメンバーとはA・Bチームの総称

- 【第1回目参加者内訳】オブザーバー：学長、教授3名、准教授4名、講師1名
- 【第2回目参加者内訳】学習者：助教6名、助手3名、嘱託2名、オブザーバー：教授3名、講師2名
- 【第3回目参加者内訳】学習者：助手6名、嘱託2名、オブザーバー：学長、教授3名、准教授1名、講師1名、嘱託2名

表2. 学習者主体のFD活動に関する経過表

<b>第1回目</b>	<b>「シミュレーターを活用した教育に関する説明会の開催」</b>
開催日時	平成24年3月5日(月) 14:30-15:30
開催場所	本学 スキルラボ室
参加人数	13名
実施内容	成人用・小児用シミュレーターの説明 シミュレーション教育の実際、演習
<b>第2回目</b>	<b>「学内の教員を対象としたFDの開催」</b>
開催日時	平成24年6月4日(月) 18:00-19:30
開催場所	本学 成人実習室
参加人数	23名
講師	阿部幸恵教授(おきなわクリニカルシミュレーションセンター副センター長、琉球大学医学部附属病院地域医療教育開発講座 教授)
実施内容	シミュレーションを用いたヘルスアセスメントの効果的な指導方法
<b>第3回目</b>	<b>「学内の教員を対象としたFDの開催」</b>
開催日時	平成25年3月5日(木) 9:00-18:00
開催場所	おきなわクリニカルシミュレーションセンター
参加人数	19名
講師	阿部幸恵教授(おきなわクリニカルシミュレーションセンター副センター長、琉球大学医学部附属病院地域医療教育開発講座 教授)
実施内容	チームワークトレーニングに焦点をあてたシミュレーション教育技法の実際(学習者体験、指導実践コース)
<b>第4回目</b>	<b>「学習者主体の教育技法の修得に向けたFD活動」</b>
開催日時	①平成25年8月13日(火) 16:30-19:40【第一段階】 ②平成25年9月10日(火) 13:00-16:10【第二段階】 ③平成25年9月27日(金) 9:00-12:10【第三段階】 ④平成25年12月 ⑤平成26年3月 } 【第四段階】実施予定
開催場所	本学 成人実習室
参加人数	① 15名 ② 22名 ③ 22名 ④未実施 ⑤ 未実施
講師	阿部幸恵教授(おきなわクリニカルシミュレーションセンター副センター長、琉球大学医学部附属病院地域医療教育開発講座 教授) ※①、②に参加
実施内容	プロジェクトメンバー6名(本学講師)が2つのグループを作り、学習者主体の教育技法についてのシナリオを作成し、助教、助手に対しシミュレーション教育を実践し、教育技法を修得する。実践した教育技法を実際の教育現場で活用しながら、④、⑤では3ヶ月後、6ヶ月後のフォローアップと評価を行う。

第二段階では、各A・Bチームが教師役を務め、学習者の看護師役として、主に助教等を対象に、第一段階で修正されたFD活動を実践した。FD活動終了後に、学外講師から全体的なシミュレーション技法のポイントや学習者の考える力を引き出すための教育技法に関する指導を受けて、さらなる学習者

主体の教授法の改善に努めた。

第三段階では、第二段階と同様に各A・Bチームが教師役となり、学習者の看護師役として、主に助手や嘱託助手を対象にして、FD活動を展開した。第四段階では、助教・助手ならびに嘱託助手が演習・実習で、学習した教育内容や技法をどのように学生

に活用できるのか、3ヶ月目と6ヶ月目にフォローアップを行う予定である。なお、第一段階から第三段階までのFD活動を、本学の教授・准教授へも公開し、オブザーバー参加を認めることで、学習者主体の教育技法についての全学的な取り組みの理解と周知を図るように努めた。

なお、模擬授業の際の写真撮影に関しては事前に口頭にて了解を得て、不都合がある場合は申しでるように伝えた。模擬授業後の感想については、匿名性の担保について説明し、無記名による自由記載の用紙を配布し、個人が特定できないように回収箱に

て回収した。回収された用紙は、教員以外の第三者によって電子化された記録として整理したものを表としてまとめた。

## II. 具体的なFD活動の内容

実際に実施したFD活動の具体的な概要とその実際の展開例について表3と写真1-4に示した。

FD活動の主なる内容は、大学院担当講師である教員A・Bチームがシナリオを作成し、シミュレーター人形や模擬患者を活用した授業案を作成した。

表3. 第3回目(平成25年9月27日)に開催されたFD概要

時間	内容:教員A・Bチームの全体の役割	学習者*
9:00~10:10 (70分)  前半 Aチーム担当	1. 今回のFD活動の趣旨の説明 (5分) 2. 教員Aチームによるシミュレーション (60分)  Aチームのテーマ:「観察と報告」 <場面>:内科混合病棟 <目標>: ①患者を受け持つにあたり必要な情報をアセスメントできる。 ②リーダーナースに必要な情報を報告し対応を提案できる。 <概要>: ① 教師役(Aチーム) 1名と看護師役(学習者) 1名、患者役 (シミュレーション人形:声のみAチーム教員) ②シナリオを活用したシミュレーション(5分) ③デブリーフィング(15分) ④学習者を変更して再度①-③を展開する。 3. 振り返り (5分) (教員Aチーム②)	1グループが学習者の時は、2グループがオブザーバーとして参加する。
10:10~10:20	休憩 (10分)	
10:20~11:45 (85分)  後半 Bチーム担当	4. 教員Bチームによるシミュレーション (60分)  Bチームのテーマ:「人工透析患者のセルフケア能力を高める対応」 <場面>:人工透析室 <目標>: ①患者の訴えに対して共感的な態度で関わりができる。 ②人工透析患者の食事指導について説明できる。 <概要>: ①教師役(Bチーム) 1名と看護師役(学習者) 1名、模擬患者役 (Bチーム教員) ②シナリオを活用したシミュレーション(5分) ③デブリーフィング(15分) ④学習者を変更して再度①-③を展開する。 5. 振り返り (5分) (教員Bチーム) 6. 全体ディスカッション (20分) プロジェクトメンバー**から、今回のシミュレーション教育を実施するにあたってのポイント、工夫した点など  (プロジェクトメンバー)	2グループが学習者の時は1グループがオブザーバーとして参加する。

\* : 学習者である助手・囃子助手は各グループ4名で各専門領域が重ならないように構成

\*\* : プロジェクトメンバーとはA・Bチームの総称

その授業案に基づき、表3で示した約3時間の授業展開を企画した。具体的な事業内容の構成は2部構成とし、前半を教員Aチームが、後半を教員Bチームが担当した。教師役である講師の教員A・Bチームが各シナリオに沿って、看護師役である学習者(助教・助手・嘱託助手)を対象にロールプレイを実施した。その後、教師役であるA・Bチームの教員がファシリテーターを務めながら、学習者チーム(各4名)が、実践したロールプレイについて振り返りを行い、学習目標が達成できるように、学習者主体の

模擬授業を展開した。

### III. FD参加者の感想

第二段階と第三段階の終了時に、A・Bチームの教師役の教員、ならびに学習者として参加した助教・助手、嘱託助手、さらにオブザーバー参加の教授・准教授に対して、A4用紙半分程度の感想・コメントの自由記載(無記名)を依頼し、その場で回収した。教師役の教員のコメントの内容については表4に示した。

表4. 第3回FD活動終了後の教員A・Bチームのコメント (6名)

<p><b>1. アドバイザーの指導や模擬授業、準備における具体的な学びや気づき</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 学習者の知識や経験に合わせて同じシナリオベースでも、シナリオの目標を変えたり、追加したりすることが大切だと思った。</li> <li>➢ 3回目のFD研修だったが、毎回学ぶことがある。</li> <li>➢ 今回はチームでディスカッションを重ねる中で様々な気づきがあった。</li> <li>➢ 他領域の教員と一緒に取り組むことで意見のズレは多いが、かえって視点を広げられたのは良かった。</li> <li>➢ 何回かデブリーフィングをする中で、学習者の反応をみながらデブリーフィングの仕方を変えるなどのポイントを学んだ。</li> </ul>
<p><b>2. 更なる学習の必要性と課題</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 準備する側は目標に向かってファシリテートを行っていくが、あらかじめ望ましい行動(学習者の)も設定しているため、その目標に向かえない場合、どうしても誘導してしまいがちである。しかし、学習者が主体的に学ぶためには誘導せず、その方向性に進めていくためのスキルが必要であると感じる。</li> <li>➢ 定期的に慣れ、身につくまで繰り返すと教育者のスキルアップにつながると感じた。</li> <li>➢ 学習者に配慮すること(迷わないように観察者として立てること)自分のタイミング(ストップする)の取り方など、もっと練習していきたい。</li> <li>➢ 細かい部分など前回できていたことが、今回の説明の際に言い忘れていたり、説明不足(もっと丁寧に説明する)等もあり、反省点もあった。</li> <li>➢ もう少しコンパクトな期間で集中的に取り組む方が身につきやすい気がする。</li> </ul>
<p><b>3. 前回よりの向上</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 何度か練習を重ね、少しずつステップアップしていると感じる。</li> </ul>
<p><b>4. 今後への意思表示(「がんばりたい」など)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 継続的に能力向上に取り組むための具体策を考えて行きたい。</li> <li>➢ 学生の演習でシミュレーションを取り入れて行うため、これまでの経験、体験を通して修得できた教育技法を活かしていきたい。</li> <li>➢ 次は実習指導で学んだことを活かしたい。</li> </ul>
<p><b>5. 学習者主体の教育技法の難しさ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 学習者主体となる教育技法の難しさを感じている。</li> <li>➢ デブリーフィングは学習者メンバーによっても流れが随分変わるので、どう拓がるか違う。でも、集約する方向を見失わなければいいのか。</li> </ul>



**写真1. 第1回目 (平成25年8月13日) :** Bチームがファシリテーター、Aチームが学習者となり実践するシミュレーション教育



**写真2. 第2回目 (平成25年9月10日) :** Aチームがファシリテーターとなり助教、助手を学習者として行うシミュレーション教育



**写真3. 第2回目 (平成25年9月10日) :** Bチームによるシミュレーション後のデブリーフィング

教師役の教員の意見として、学習者主体の教育技法での学びや気づき、さらなる学習意欲や課題を明確にし、FD活動を重ねるごとに自らの教育力の向上を実感し、実習指導に活かしていきたいとの記載があった。

学習者である助教などからは、開始当時は、学習者としての緊張感や不安を抱えていたが、時間を経るうちに、ファシリテーターの効果的な進め方や教育方略に学びの楽しさや達成感を感じ、積極的に指導者の経験を積んでいきたいとの意見があった。その反面、実際に教師側として教育指導に取り入れていくにはかなりの努力が必要だと感じていた。

オブザーバーの意見として、「自ら体験してみること」それが一番指導力の向上につながることやデブリーフィングの基本的な方法が理解できたこと、とても難しい授業形態であるが取り組む価値は高いと



**写真4. 第2回目 (平成25年9月10日) :** シミュレーション教育終了後の阿部幸恵教授による指導の意見があった。

### おわりに

4ヶ月という短い期間ではあったが、新たな学習者主体の教育技法を修得するために、大学院担当教員の講師を中心とした全学的なFD活動を展開することができた。教師役を努めた講師が学習者である本学の助教・助手などを対象に、具体的な教育指導を実践することで、自らの教育力の向上につながったのではないかと考える。指導を受ける側も学習者としての気持ちを再認識することができ、学習者にとっても能動的で主体的に学ぶための新たな教育技法の発見につながったのではないかと考える。

今回の学びをどのように学部学生や大学院生の教育に取り入れていけるのか、各教員の力量に任されているが、学生の主体的な学習能力の向上に寄与す

るのであれば、質の高い看護ケアの提供につながると考える。よって、常に学習者の主体性を考慮に入れた教育指導のあり方について模索し、継続して教育改善とその評価を行っていくことが重要であろう。

今後は学内の教員だけでなく学外の看護職者の実践能力の向上にもつなげられる教育活動まで展開できるようにすることが課題である。

## 引用文献

Dobald R. Woods 著, 新藤幸恵訳(1994/2003) :

*Problem-based Learning* 判断能力を高めるための主体的学習, pp.14, 東京, 学書院.

前田和子, 大湾明美, 石川りみ子, 佐久川政吉, 仲曾根洋子, 宮城裕子, 大川嶺子, 伊牟田ゆかり (2011) : 沖縄県立看護大学と沖縄県立宮古病院看護部との協働による実習指導力向上のためのプログラム, 平成 22 年度報告書, pp.1-26, 沖縄県立看護大学.

前田和子, 神里みどり, 大湾明美編集(2012) : 平成 23 年度専門的看護師・薬剤師等医療人材養成事業, 島しょにおける「包括的専門看護師」の養成ー「教育カリキュラム開発による看護の役割拡大」の教育プログラムー, 平成 23 年度成果報告書, pp.1-72, 沖縄県立看護大学・大学院

前田和子, 神里みどり, 大湾明美編集(2013) : 平成 23 年度専門的看護師・薬剤師等医療人材養成事業, 島しょにおける「包括的専門看護師」の養成ー「教育カリキュラム開発による看護の役割拡大」の教育プログラム, 平成 24 年度成果報告書, pp.48, 沖縄県立看護大学・大学院.

Mernagh 豊澤英子(2012) : PBL チュートリアルの実際 その 1, 看護教育, vol.53(2), p.132-137.

Rebecca J. Sisk (2011): *Team-Based Learning: Systematic Research Review*, *J of Nursing Education*, vol.50(12), p.665-669.

杉本敬子(2012) : 多様性を追求する目を養う *Team-Based Learning(TBL)*, 看護教育, vol.53(3), p.252-253.